**Chapter6 論点**

◇教育を語る上での「二元概念」

◆p.134：

・教授を示す描写は、内容(何を教えるか)と教授法(どう教えるか)の2つの項目に分かれている。

⇒この二元概念化は、教師の目的・理想像・関係性・倫理・義務・情熱・経営・財産といった教師の実践の重要な要素を軽視する。

・児童中心の教授法ではしばしば…

⇒子どもは生得的に善とみるべきであるかどうか、子どもに必要なものは自然で生得的なものかそれとも仲間や親によって限定されたものかどうか、というような議論がされている。

筆者は、

『教育における二元概念は、教師の実践の重要な諸要素（教師自身の目的・理想・義務・情熱、生徒との関係性、管理の側面など）を軽視している。この二元概念は、教授や学校、生徒の生活に真の改善をもたらさない。』

という意見を持っている。

本章では、上記の教師の実践の重要な諸要素に着目しながらタジキスタンやキルギスの例を概観することで、二元概念の考えが存在することによって教育の改善がうまくいっていないことを示そうとしている。

班で

筆者の『***二元概念にとらわれない考え方***をするべきだ』という意見について考えてみた。

***太字***の考え方は、「状況に応じた教授法を実践していくべき」とも言い換えられる

BUT…

この考え方が、本当に教授や学校、生徒の生活に真の改善をもたらすのかどうかは

 本章の中では明かにされていない

（改善にも様々あるが）例えば政策でもって上記のような改善を図る場合を考えてみた。

ここで　果たして***太字***の考え方を政策に落とし込めるのか？という疑問が浮かんだ。

【論点】

***二元概念にとらわれない考え方***（状況に応じた教授法を実践することなど）

を落とし込んだ政策とはどのようなものになるのか。